

目次

卷頭言 ..... 一

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色 ..... 小林 芳規 ..... 五

「ヤヲラ」と「ヤハリ」 ..... 来田 隆 ..... 四

「都合」の意味・用法について ..... 原 卓志 ..... 六

「仰天」のよみと意味 ..... 榑 竹民 ..... 六

平安・鎌倉時代における「ゆする」「どよむ」の意味用法について ..... 土居裕美子 ..... 一六

観智院本『類聚名義抄』における熟語に用いられる漢字字体について ..... 田村 夏紀 ..... 一四

..... 田村 夏紀 ..... 一四

中世真名本に於ける「而」字の用法と訓とについて ..... 橋村 勝明 ..... 一六

—— 妙本寺本『曾我物語』を中心として ——

和化漢文と定家の訓読 ..... 田中 雅和 ..... 一七

—— 石清水八幡宮権別当田中宗清願文案における助詞と助字との関係 ——

声明資料における補助記号「火」について ..... 浅田健太郎 ..... 三三

—— 音楽譜における言語事象の現れの一例として ——

金沢文庫本群書治要に於ける「願」字の訓読について ..... 連 仲友 ..... 三三

中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同……………永松 寛明……………三三

——「者」字の訓読法について——

自證房寛印の表白集について——十二世紀における表白集の編纂活動——……………山本 真吾……………二六

広島大学文学部蔵『聲明集』解説並びに影印……………花野 憲道……………三〇四

専修寺蔵『善信聖人親鸞傳繪』翻刻並びに索引……………

……………広島大学学校教育学部日本語史研究会……………三五

東京大学国語研究室蔵『佛母大孔雀明王經』の分韻表……………李 京哲……………四〇五

## 奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

小林 芳 規

### 目次

- 一、はじめに
- 二、漢文の読解を反映した敦煌文献の奥書
- 三、本邦の訓点資料において奥書に「聴・聞」「講・講師」の語を持つもの——九世紀資料と十世紀南都資料——
- 四、本邦の訓点資料において奥書に「伝受」並びに「点」「読」の語を持つもの——十世紀以降の天台宗・真言宗資料——
- 五、同一の訓点資料に異種の訓読の併存を示す用語のあるもの——十一世紀の天台宗・真言宗資料——
- 六、訓点資料の奥書に「本云」「本奥云」「点本云」等の本奥書云々の用語を持つもの——十二世紀の天台宗資料——
- 七、奥書の用語に基づく漢文訓読史の時期区分

### 一、はじめに

本稿の目的は、平安時代四百年間における漢文訓読語の変遷を叙述する手段として、時期区分を設定する意義と方法とその必然的理由を説くことにある。

漢文訓読語の変遷は、日本語の変遷の一面として平安時代を通じて連続した時間の流れの中で行われている。従って、平安時代の四百年を連続のものとして大きく把握するのも一つの方法であろう。大坪併治博士が『平安時代訓点語の文法』<sup>(1)</sup>で

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

## 「都合」の意味・用法について

原 卓 志

## 目次

はじめに

- 一、中国における「都合」と上代の「都合」
  - 二、平安時代の「都合」
  - 三、院政・鎌倉時代の「都合」——専門用語から一般用語へ——
  - 四、院政・鎌倉時代の「都合」——「惣都合」登場の背景——
- むすび

## はじめに

鎌倉時代に成立した軍記物語では、軍勢の総数などを具体的な数量で表現する際に「都合」という語を頻用する。例えば、覚一本系『平家物語』には、次のように「都合」が使用されていて、総計四十一例見られる。<sup>(1)</sup>

○吾身の榮花を極るのみならず、一門共に繁昌して、嫡子重盛、内大臣の左大將、次男宗盛、中納言の右大將、三男知盛、三位中將、嫡孫維盛、四位少將、惣じて一門の公卿十六人、殿上人卅餘人、諸國の受領、衛府、諸司、都合六十餘人なり。(巻第一)

○片田舎の侍どもの、こはらかにて入道殿の仰より外は、又おそろしき事なしと思ふ者ども、難波・瀬尾をはじめとして、都合六十餘人召よせ。(巻第一)

「都合」以外には、右の第一例目のように「惣じて」を用いる例が二例、また、次掲のように「すべて」を用いる例が二例見られるのみである。

○それよりこのかた、野心をさしはさんで朝威をほろぼさんとする輩、大石山丸、大山王子、(中略) 悪左府・悪衛門督にいたるまで、すべて廿餘人、されども一人として素懷をとぐる物なし。(巻第五)

このように、『平家物語』では、数量の合計を導く表現の中心的な語として「都合」が使用されていることが理解される。<sup>(2)</sup> 本稿では、数量の合計を導く表現に関する語彙の体系を明らかにするための一段階として、この「都合」を取り上げ、上代から鎌倉時代の使用実態と意味・用法を分析し、中世に数量の合計を導く表現の中心的な語にいたるまでの経過を考察してみたい。

なお、上代から平安時代にかけての「都合」が、音読される語であったのか、訓読される語であったのか、訓読されるのであれば、どのように訓読されたのかなど、読み方が不明であるという問題が存する。本稿では、ひとまず「都合」の読み方についての問題を捨象して、「都合」という漢字連続、すなわち連文「都合」を考察の対象とした。したがって、特にことわりがない場合、「都合」は連文「都合」を指すものとする。

## 一、中国における「都合」と上代の「都合」

我国上代に見られる連文「都合」の使用実態について言及する前に、中国古典における「都合」の使用状況について触れておきたい。中国古典のうち、漢籍類に「都合」の使用例を求めることは極めて困難である。『佩文韻府』には使用例が収録されておらず、『漢語大詞典』にも収録されていない。『大漢和辞典』には元の馬端臨の撰になる『文献通考』

「都合」の意味・用法について